

## 01-032

### ソーシャルメディアを活用した予防メッセージの伝わり方の分析

西田 佳史<sup>1</sup>、北村 光司<sup>1</sup>、山中 龍宏<sup>1,2</sup>

<sup>1</sup>産業技術総合研究所 人工知能研究センター  
<sup>2</sup>緑園こどもクリニック

#### 【目的】

小児保健領域では、日々、疾病などの予防のための多様な啓発活動が行われている。しかし、従来、啓発情報がどのように受け手に使われているかを評価する方法はアンケート調査などに限られ、人的・経済的コストの面からも限界があった。一方、最近、ソーシャルメディアの発展によって、従来とは異なる調査が可能になりつつある。本研究では、ソーシャルメディアを用いた傷害予防メッセージの伝わり方を分析した。

#### 【方法】

情報源として筆者らが関与した新聞記事として、「サッカーゴール転倒、中学生1人ぶら下がりでも危険」(2017/8/11付け朝日新聞)と、「子どもから目を離さないで・・・「無理」0.5秒で事故防げる？」(2018/6/16付け朝日新聞)を取り上げ、これらの記事に対するYahooニュースサイトでのコメントを記録して分析した。分析の対象としたのは、前者が287件、後者が1,114件のコメントである。反応数(賛成と反対の合計数)と賛成の割合などの観点から重要コメントを抽出した。

#### 【結果】

サッカーゴールの記事では、「ゴールはぶら下がるものではない」(反応数1,949、賛成率91%)、「ゴールは何も悪くない」(反応数1,381、賛成率89%)、「ぶら下がるのも危険だけど、運ぶのも危険。」(反応数540、賛成率82%)などが抽出された。子どもの見守りに関する記事では、「子供が大きな怪我をせずに無事に育つのは運が良かっただけ・・・」(反応数4,858、賛成95%)、「小さい子どもって大人が想像しないような動きをするからね。ヒヤッとした経験がある大人は多いと思う。」(反応数3,068、賛成96%)、「もちろん親が子供からなるべく目を離さないことも大事なんだけど、それ以外の仕組みとしての危険回避にもみんなで取り組むべきと感じた。」(反応数2,664、賛成92%)などが抽出された。

#### 【考察】

サッカーゴールの記事では、ゴールを固定するという予防法よりも、ぶら下がる行為に関する反応が多かったのに対し、子どもの見守りに関する記事では、見守ることの限界と予防法の必要性が伝わっている反応が多く、予防法を伝えるという観点から大きな差があることが確認された。今回の分析により、啓発の伝わり方の定量的分析にソーシャルメディアが有用であることが確認された。今後、ソーシャルメディアを積極的に活用し、啓発活動に科学的な視点を持ち込むことによって、受け手の反応分析に基づいた効果的な情報のデザインへの活用を推進すべきである。

## 01-033

### 未就学の子どもを乗せた自転車の使用実態に関する調査

山中 龍宏<sup>1,2,3</sup>、太田 由紀枝<sup>2</sup>、北村 光司<sup>1,2</sup>、西田 佳史<sup>1,2</sup>

<sup>1</sup>産業技術総合研究所 人工知能研究センター  
<sup>2</sup>セーフキッズジャパン  
<sup>3</sup>緑園こどもクリニック

#### 【目的】

未就学児を伴った移動手段として自転車は広く利用されている。未就学の子どもを乗せた自転車の事故が多発しているが、自転車の使用実態が不明確であるために、効果的な対策がとられていないのが現状である。本研究では、未就学の子どもを乗せた自転車使用の実態調査を行った。

#### 【方法】

インターネットによる調査機関に依頼し、日本国内に住む20歳から99歳の人うちで、同居する未就学児がおり、子どもを乗せて自転車を利用している人(N=286)を対象とした。主な調査項目は、自転車の利用頻度、同時に乗せる子どもの数、自転車の種類(電動アシストの有無など)、子どもを乗せる位置、運転時間・時間帯、運転目的、各天候時の運転の有無、荷物搭載方法、代替交通手段、事故・インシデントの経験などである。

#### 【結果】

自転車の乗せる子どもの数(最大)は、一人が最も多く77%、ついて、2人が22%、3人が1%であった。利用している自転車の種別は、幼児2人同乗用電動付きアシスト自転車が43%と最も多く、電動アシスト全体で56%であり、主要な自転車種別であることが分かった。子どもを座らせる位置に関しては、後ろシートに一人が54%で最も多く、次いで、前と後ろシートに各一人19%、前シートに一人17%、抱っこ・おんぶを伴うものが8%程度であった。自転車の利用目的は47%が保育所・幼稚園であり、公園・児童館22%、買い物等家事関連26%であり、主要な目的が保育所・幼稚園の通園・通所であった。天候と自転車利用との関係では、降雨時・降雪時の場合、「運転する」が13%、「少しの雨・雪であれば運転する」が26%、「少しの雨であれば運転するが、雪であれば運転しない」が25%であり、降雨時・降雪時でも運転することがある人は64%に上ることが分かった。ハンドル部分にハンドバックや傘を掛けた状態での運転経験は37%(ある、もしくは、時々ある)であった。

#### 【考察】

未就学の子どもを乗せた自転車利用の実態を明らかにした。今回判明した自転車利用の主な目的が保育所・幼稚園の通園・通所であること、車体の重い電動アシストが主要な自転車となっていること、降雪・降雨の場合にも自転車を使用していること、抱っこ・おんぶをしながら運転している人も一定数いることなどを踏まえ、移動の代替手段の提案、乳幼児を安全に運搬する自転車の開発など、実効性のある予防策の開発が急務である。